

家族がひとつになって演じる楽しさと、喜び。 —生涯のライフワークに

子どもの頃、小学校に劇団がやってきて芝居を見せられたことがある。役者さんのセリフや息遣いに「喜—憂し、食い入るように舞台を見つめた記憶が今でも残る。

今回、紹介する加藤聡美さんも地域の保育園や小学校、老人ホームなどへの演劇公演を長年、ボランティアとして続けてきた。所属する「ぶらべら雑技団」は、聡美さんのご両親を中心に姉や友人が加わって誕生した総勢11名の小さな劇団だ。「最初は両親にたたくついで行っていただけ。いつの間にか自分も参加するうちに劇団員としての責任もでてきましたね。21歳にして既に芸歴10年の看板女優でもある。『楽しいから続けてこられたと思います。みんなでひとつのものを作り出せることや、それを観た人が喜んでくれるのが嬉しい。お芝居をやらせてもらってる、って思っています』と加藤さん。

活動は、公共施設等への訪問がメイン。声がかかれはじめても行くというが、すべてがボランティアゆえ運営は楽ではない。高校時代、同じ演劇部が縁で結婚されたという両親、脚本と人形製作は母が、演出や照明を姉が、その他の交渉ことはもっぱら父が担当する。各々が役者であり裏方も務める家族総出の手作り感がこの劇団ならではの味



演劇活動の
ボランティアを
10年来続ける

加藤 聡美さん
(インド哲学科4年)



わい。「芝居のことも含め家族で何でも話し合えるんです。稽古場でも、開演の時でも必ず芝居の話に帰って、だからセリフや呼吸もびつたり合う」。

年々、公演依頼は増えている。地元市原市が主催する人形劇祭りへの参加も常連になった。今後は学校を中心に演じていきたいと思っている。「以前、養護学校でお芝居をした時、先生が子どもたちの写真ばかりを撮るので理由を聞いたら、こんな表情は初めてだからって。その時、演劇をやっていて本当にたいたと感じました。芝居は一生続けたい、ゆくゆくは脚本も手がけてひとり芝居もやってみたいと夢は広がった。『まずはその可能な就職活動を成功させなくちゃ』」。

C i r c l e W a t c h i n g

サークルウォッチング 競技ダンス部



SHALL WE DANCE?
華麗なダンスは、
体力第一の体育会系!

「競技ダンス」といってもピンとこない人も多いだろう。「チャチャチャ」「サルバドール」「パンドフレ」のラテン型4種目、モダン型とよばれるワルツ・タンゴ・クワイックステップ・スローの4種目の計8種目でダンスの技を競うスポーツである。

部員は、川越と白田キャンパスの学生が22名、さらに女子栄養大学、目白大学の学生も8名所属する。文系、理系、他大学とまさに多民族の共存である。練習は週2回、木曜日は川越の部員と女子栄養大が川越キャンパスで、白山の部員と目白の部員が朝霞キャンパスで行い、土曜日は朝霞キャンパスで全体的練習をおこなう変則練習だ。他大学や他キャンパスのパートナーとの時間調整が難しい、練習場所の確保にも非常に苦労している。競技ダンスのシェイズは、革底なので、踊るには床が重要なんです。床が滑らないとステップの練習ができないと、代表を務める泉山駿さん(電気電子工士)は話す。

夏休みには群馬県の沼田市で6泊7日の合宿を行い、体力強化を中心メニューに練習を行う。目標は6月に大阪で、12月に東京で行われる全国大会への出場。サークル内で選考を行い、各種目にエントリーする。泉山さんも優雅なイメージで文化系だと思われがちだが競技ダンスですが、パリのバリの体育会系」と笑う。

「今いる部員はみんな未経験だった。最初は女性と組むドキドキや恥ずかしさがあったけど、それより徐々になんか夢中になり、大会に出て賞でできなさと悔しくなつて、練習にはまる。ひとつのステップをマスターするのさらに難しいステップや動きを覚えたくなるんです。サークルの楽しさから、いつの間にか競技の魅力に取り憑かれてしまっていますよ。

競技ダンスはテレビで見ると興奮できるスポーツだとか、しなやかさと強さが共存するのも魅力だ。文系や理系を問わず、他大学の仲間もできるし、ぜひ多くの新入生に入室してもらいたいです。将来的には、趣味のひとつとしてダンスを自分の生活に入れておきたいと思っています。うーん、踊りませんなか「踊りませう」と誘えるなんて、なんだかステキ。